
【カルマの手紙】

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【カルマの手紙】

【コード】

N0918X

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

いらっしやいませ。

ようこそ、アカシックレポートの館へ。

今宵のストーリーテラーを務めさせていただくベルン＝デルワルトと申します。

わたくしが今回、お客様に提供します物語。

それはとある不幸な少女と 不器用な黒魔術師の短いお話です。

（この物語はフィクションです。作中のベルンの言動にかかわら

ず、実在する人物、もしくは実在した人物、団体とは一切関係ありません)

1【語り部としての矜持とでも思ってくださいれば幸いです】

いらっしやいませ。

ようこそ、アカシックレポートの館へ。

今宵のストーリーテラーを務めさせていただくベルン＝デルワルトと申します。以後お見知りおきの程を。

お客様は我が社のご利用は初めてで？

はあ、そうでしたかそうでしたか。それでは、我が社のシステムについて少しばかり拝聴ください。いえいえ、お時間は取らせません。さらっと、いきますとも。

まず、お客様がここにおられる時点で、我が社 アカシックレポート が情報を買って買いうる諜報機関であることはご存知かと思えます。ええ、その通り、グレーゾーンです。警察の目を欺くのは、なかなか骨が折れます。

まあ、そんな黒い内部事情は横に置いておいて。

我が社の情報伝達手段は他社に比べて、びつみょーに特殊でして、わたくしが語り部となり、あなたが欲している情報を物語形式にして伝える、という形になります。

誠に勝手ながら、お客様からの質問は、物語が終わるまで一切受け付けないことにしています。語り部としての矜持とでも思ってくださいれば幸いです。話の腰を折られるのは、あまり気持ちの良いものではありませんので。

なお、情報の金額に關しましては、お客様の一存に委ねられています。

わたくしのお話を聞き終えた後、お客様が『ベルンの語った物語には、これだけの料金を支払うだけの価値がある』と思った分だけで結構なのです。ええ、もちろんお客様が聞くに値しなかったと判断されたのなら、無賃でも構いません。

説明は以上です。

この契約に同意できないようでしたら、回れ右をしてお帰り下さいますよう。

…… よろしいですか？

では、最後に。

これよりわたくしがお客様に提供する物語は、ノンフィクションです。

実在する人物、もしくは実在した人物や団体、作戦、何もかも名称をそのまま引用していますが、くれぐれも、お話の最中はお静かに願います。

さあ、お待たせしました。

ベルン＝デルワルト・プレゼンツ。

とある不幸な少女と 不器用な黒魔術師が出会う短いお話の、始まり始まりです。

2【レイナの思考回路はついに歯車の動きを止めて壊れた】

本当に恐ろしいのは火災ではない、とレイナは思った。

雲一つなかった夜の空から急に涙のような雨が降り出したから、ワラブキ屋根からワラブキ屋根へ延焼する炎は、徐々にその勢力を失っていった。

近頃は祈禱師たちがどれだけ祈りを続けても、村の田畑は干からびかけている状態から脱しなかったのに、この期に及んで神様がせめてもの救いとして寄越してくれた通り雨だったのだろうか、レイナの頭上ではすでにたくさんの星座が煌めいている。

いつもの夜空が戻ってきた、とレイナは天を仰いで思う。

でもいつも通りには戻らない、とレイナは濡れた前髪から雨滴を落としてしまった。

遅いよ、神様。

燃えるモノがほとんど燃え尽きていたからこそ、津波めいていた火の海は間もなく消えたのだ。山火事に発展しなかったのは、風のない日だったからか。急ぎ足の雨雲ごときで鎮火できる火力ではなかった。

この惨事は、偶発的なものではない。

レイナの村は焼かれたのだ。

彼らはたぶん反政府軍の残党兵とか、傭兵崩れの寄せ集めではないだろうか。何の前触れもなく襲来した茶色い軍服の集団に、レイナの両親は蹂躪され、焼き殺された。

皆、死んだ。

老若男女問わず殺された。

村人全員に慕われ、そして誰に対しても優しくかった村長や、レイナが大好きだった学校の友達や先生も、隣の家に住んでいた若い夫婦と二人の間にできた赤ん坊も。

レイナは物陰に隠れていたから生き残れた。恐くて声も出なかったのだ。

ただただ息を潜めて、悪意に満ちた嵐が過ぎ去って行くのを一人で待ち続けた。

レイナが賊に見つからなかったのは、たまたまだろう。

偶然以上でも以下でもなく、運が良かっただけ。

運が良かった？ 本当に？

今、ここに立っているのはレイナだけなのに、家族を失って彼女だけが生き残ったことを本当に幸運と呼ぶのならば、それはなんて残酷な言葉なのだろう。

レイナの慟哭は、小一時間も前に枯れていた。

茶色い軍服を着た野蛮な男たちが殺戮を尽くして満足顔で村を去った後、レイナは丸焦げになった両親や村長をスコップで掘った地面の穴に埋めて、さらに土を被せたその上になるだけ綺麗な石を集めて、まるで死者の慰めにならないお墓を作った。

むなしだけの作業だと理解していた。

けれど、この場において唯一の生者であるレイナは、見つけることができた友達の何人かを埋めて、見つけることができなかつた友達や先生には祈りだけを捧げて、顔見知りの人もあまりそうでなかつた人も、できる限り埋めてあげた。

長い長い時間をかけて、雨だけではない水分を吸った土を掘る。

次々と横並びに完成されていく不出来なお墓の数を見れば、誰もが生存者の可能性について一縷の望みも残されていないと頭を垂れるだろう。

だからレイナも無言でお墓作りに没頭した。

全身を泥だらけにしつつ、ひび割れた爪の中に土が詰まっていくのも気にせずに。

胸の周辺からせり上がってくる胃液と嗚咽を何度も喉の奥に飲み下して。

両目に涙を浮かべて鼻をすすりながらも、決して死者の墓にはこ

ぼさずに。

村の中でも特に大切な人たちが、まだたくさん見つかっていなかったけれど、レイナは安らかになれていない死者たちを一人ずつ順番に埋める。

しかし、彼女の強さもそこまでだった。

きっとここまですべて死に逃げてきたのだろう、隣の家に住んでいた若い夫婦と、一歳にもならない赤子の黒こげを村の端っこで見つけてしまった瞬間に、レイナの思考回路はついに歯車の動きを止めて壊れた。

3【だって、普通の人間は一度死んだら生き返らないもの】

雨に濡れた土の独特な匂い。

そして何より新鮮な酸素がうまかった。

肺に溜まった有毒な煙が浄化させていくようで、レイナは必要以上大きな呼吸を続ける。

気づけばレイナは煤だらけの両足を動かして、月の明りだけを頼りに暗い山の中を歩いていた。小動物や虫たちの気配が消えた世界は、とても寂しい。

村長の許可なく踏み込んではないと小さい頃から両親や先生に言われ続けていた、北西の秘境。 だけどレイナにとって、そんな禁忌は、もうどうでもいい話だった。

死臭漂う黒い煙が満天の夜空を汚した方角は、すでにレイナの遙か後ろにかすれていた。 家族も友達も失った彼女は、もう全焼した村には振り返らないし、戻らない。

地面の土は先程の通り雨でぬかるみ、かなり歩きにくかった。

おまけに足場は平淡ではなく、やや傾斜している。

うっかり足を滑らそうものなら大変なことになるだろうに、レイナは全くと言っていいほど足下に気を配らず、そこにある前進のみを求めた。 時には樹の腹にもたれかかって、ふらふらと。

短い通り雨に晒されたレイナの髪や服はとつくに乾き切っていたけれど、草木がうつそうと生い茂る山の奥はまだまだ湿っていた。 たまに深緑の葉から細かな樹雨が弾けて、レイナの煤まみれ土まみれな頬を涙の代わりに軽く濡らした。

道とは呼べない険しい道のり。

レイナの華奢な体を、そんな先へ突き進ませる原動力の正体は分かりやすい。

仄暗い復讐心だ。

突如レイナの村を襲った茶色い軍服の集団に、復讐するためだ。彼らは戦争に使うゴツゴツとした装甲の改造自動車に乗って、レイナの村にやってきた。あの兵器で破壊の限りを尽くし、その足で帰って行ったのである。

追跡は可能だった。

ずっと人の手に染まらなかつた樹齡何千年という神聖な山々の樹を、野蠻な彼らは野蠻な科学の力でなぎ倒して、山の神様をも恐れぬ四輪の足跡を残しているからだ。

レイナは車のタイヤの跡を獣道から追っていた。

しかし、だからと言って、徒歩が自動車の速度に追いつける道理はない。

ましてや仮に追いついたとしても、レイナに成せる術はないだろう。複数人いながら銃火器を持つ大人の男たちに、非力な少女の四肢で一体どんな復讐が果たせると言うのか。村の皆と同様、面白半分にいたぶられて、土くれに還るのが関の山だ。

でも、そんなことは百も承知の上である。

止まることはできないのだ。

歩かなければならない。

ここで止まると、きつと二度と両足に力が入らない。

涙と声は枯れてしまったけれど、悲しみは頭上の夜空のようには晴れていないのだから。

そうしてレイナは暗闇を歩き続けた。

飲まず食わず、黙々と、ただひたすらに、力尽きるまで見知らぬ山中に行く。

歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。

歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。

歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。

歩いていると無駄なことを考えなくて済むから楽だった。憎悪にだけ徹していれば良いから楽だった。

もう人間なんて大嫌い。

あの惨劇を目にしたら、もう人なんてイキモノが信じられなくなる。

人が人に対して、あれほど残虐なことを行えるなんて。

人が人を苦しめて、あれほど悪魔じみた微笑を浮かべられるなんて。

殺しの快楽を前提にしたグループが最近、各地の村で出没している噂は、レイナが住んでいた村にまで届いていた。

だから万が一に備えて、彼女の村でもある程度の対策は施していた。ところが、奥深い山の自然に四方八方を隠された農村の前時代的な守りは、世界の中心地帯で進歩し続ける科学力の前では、何の意味もなさなかったのだ。

もう、あそこには誰もいない。

レイナが一〇年もの時間を過ごした、帰るべき場所は失われた。視野を世界規模に広めても今のレイナに寄る辺はなく、一人ぼっちだった。

ああ、もう人間なんてやめたいな。

だが、レイナとて死ぬのは嫌だった。安らかな死など想像できない。皆の悲惨な死に方が瞼に焼きついて離れないのに、安楽死なんてイメージできるわけがない。

ああ、もう人間なんてやめたいな。

そこでレイナは考えた。

どうすればやめられるだろう、と。

生きながら人間をやめるには、どうすれば良いんだろう、と。

あ、そうだ。良いことを思い出した。

レイナは母から、こんな話を聞かされたことがある。

彼女の村から北西の樹海にひたすらひたすらひたすら進んだ先に、孤独な魔法使いが住んでいる、と。

いや、正確に言うならば魔法使いではなく、死霊魔術師　ネク
ロマンサーだったか。

レイナの記憶が正しければ確か、『死者をこの世によみがえらせてくれる人のこと』をそう呼ぶはずだ。

そんなあやかしの術を使える人がいるなんて眉唾ものだけれど、本当に実在するならばそれは素敵だなとレイナは思う。

そうだ。その人に会いに行ってみよう。

いつしかレイナの歩調は変わり、軍服の集団が手つかずの山にもたらした爪跡を追うのもやめて、進行方向をずらしていた。

名案が脳裏を過つたのだ。

ネクロマンサーさんに優しく殺してもらって、それから不思議な力で生き返らせてもらえば、きっと目が覚めた時には朝で、もう人間じゃなくなってる。だって、普通の人間は一度死んだら生き返らないもの。

人は、一人では生きていけない。

あらゆる面で他人の生活がなければ、生きていけない。精神的にも肉体的にも。

レイナが住んでいた村だって、都会のように繁栄した人類社会からは閉鎖的だったけれど、それでも村の皆で助け合って生活をしていた。

でも、アンデッドなら食べ物はいらない。よって働く必要がない。つまり、人と関わらなくて済む。ついでに死なない亡者なら、軍服の生者たちに一矢報えるかもしれない。

そうだ。それが良い。

ああ、でも断られたらどうしよう、とレイナの心に不安が波打った。

いいや大丈夫だ、とレイナは自身の背を鼓舞した。

ネクロマンサーは人だけど、人が嫌いだから山奥でひっそりと暮らしているんだ、そうに違いない。でないと不便だ。レイナの村よりも不便だ。他人の力が届かない秘境の生活は、色々と不便なのだ。

だったら、共感してもらえないはず。

行こう。ネクロマンサーさんに、殺されに行こう。

それでも、やっぱり死ぬのは恐かった。

だけど、同じ人間嫌いならきつと話を分かってもらえて、優しく殺してくれるはず、とレイナは自身に言い聞かせる。

そうしたら生き返らせてもらって、人間をやめるんだ、と。

「行こう。ネクロマンサーさんに、殺されに行こう」

声に出して決意を固める。

レイナの壊れた思考回路から生まれた、そんな歪んだ希望こそが、皮肉にも彼女の肉体と精神を支え続けていたことに、誰が気づけただろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0918x/>

【カルマの手紙】

2011年9月27日06時41分発行